

成果報告書

I. 研究概要

氏名	洪(ホン) 珉(ミン) 杓(ピョ)
所属	啓明大学校 国際学大学 日本学科
招聘回 (招聘期間)	第7回 (2012年10月1日～2013年8月31日)
招聘研究テーマ	韓国人日本語学習者のための日本語文化教育方法の構築 Building up the education method of Japanese language and culture for Korean Learners of Japanese
研究目的	これまで韓国で行われてきた日本語教育は文法や句型を中心とする構造主義的な教授法が中心を成してきた。このような文法や句型を重視する日本語教育は、道具の名称や構造ばかり教え、その使い方は教えないことと似ている。そこで、本研究では日本の文化的要素を教材に取り入れて教材の中で文化教育を実現するにはいかにすべきか、その方法を探り構築することを研究の目的とする。

研究概要：

韓国の教育部では2007年に中・高校の教育課程を改定しながら日本語科目の基本性格に「意思疎通機能と場面に応じた言語行動文化を理解し、相互行為を重視する日本語学習と文化間の相互理解力を養うことに重点を置く。」という「言語行動文化」項目を追加した。つまり、2007年の改定前までは日本の伝統文化や生活文化が文化的内容の中心であったが、2007年の改定によって言語行動文化が新たに加わったのである。実際にこのような2007年改定の教育課程に従って作成された中・高校の日本語の検定教科書(6種)をみると、様々な言語行動や非言語行動の内容が反映されている。また最近、大学の教養日本語教育においても言語行動や非言語行動を扱っている教材が増えてきており、日本語関連の専攻教育においても日本の言語文化を専門的に教える講座や科目が増加する傾向にある。

しかし、韓国の日本語教育においてはこのような日本の言語文化を教える準備がまだ出来ていないのが現状である。つまり、現在韓国の中・高校で日本語を教えている教師や大学で教養日本語を担当している多くの講師は日本での留学経験も少ないし、大学では文法や句型中心の日本語教育を受けたので日本の言語文化に関する知識や情報は多くない。また、日本の伝統文化や生活文化に関する資料や教材は多く出ているが、言語文化に関する客観的な資料や参考図書はほとんど出版されていないのが現状である。

このような現状を踏まえ、本研究では韓国の中・高校の日本語教師や大学で教養日本語を担当している講師、また専攻科目として設けられている日本語文化の関連科目の受講生や担当教師のため、日本の言語文化の教育方法を構築し、最終的にはそれを教材化することを目指している。また、この研究は日韓の相互理解の観点から行われるため、日本における韓国の言語文化の教育にも活用してもらうことを目指している。また、大学や大学院の専攻授業の場合は、日韓の言語文化の違いを理解するに止まらず、本人が決めたテーマを直接調べ、その結果を発表することによって教師中心ではなく、学習者中心の授業ができるように構成されている。具体的な教材の構成と目次は以下の通りである。

<教材の構成>

- (1) 学習目標
- (2) 日韓の言語文化の比較(本文)
- (3) 裏づけデータ
- (4) 調べてみよう

<目次>

第1課 言語行動と調査方法	第7課 言語生活の日韓比較
第2課 挨拶行動の日韓比較	第8課 親族呼称の日韓比較
第3課 誉め行動の日韓比較	第9課 夫婦呼称の日韓比較
第4課 相づち行動の日韓比較	第10課 対人意識の日韓比較
第5課 初対面の言語行動の日韓比較	第11課 接触行動の日韓比較
第6課 敬語行動の日韓比較	第12課 対人距離の日韓比較
第13課 領域意識の日韓比較	

展望：

このような日本言語文化を取り入れた教育方法が構築されれば、教科書や教材の形で韓国の高校や大学の教師たちに提供し活用してもらうことで、結果的に韓国の日本語教育に大いに貢献でき、併せて日本国内の日本語教育や韓国語の教育現場でも活用いただけるものと確信している。そして、長期的には今回の研究成果を中国語や英語などにも翻訳し、世界中の日本語教育の資料として発展させ、貢献できるものにしていきたいと考えている。